

旅団の暗号書は事件前月の昭和十二年六月に改定され、隷下部隊に配布予定中だった。事件発生の翌七月八日夕刻、旅団司令部は豊台に進出したが、新暗号書は旅団と共に移動せず、北平・東交民巷の旅団司令部の鉄製行李の中に納められた儘だったのである。副官や担当下士官は何故暗号書を司令部と共に移動させなかつたのか。恐らく、今回の事件も従来と同じく、すぐに解決するものと期待してゐたからであらう。それ故、事件が拡大するや、旅団司令部は無線電話と逆文(例へば旅団を「ンダヨリ」と書く)で発信する他なかつた。暗号書が旅団に運ばれたのは漸く七月十五日になつてからで、二十八日南苑攻撃の時にはこの暗号が使はれてゐる。事件勃発当初、我が旅団司令部が暗号書を現地に持参しなかつたことは、その不用意はともかく、我軍にとつて事件が寝耳に水であつたことを物語る有力な傍証ではなからうか。

前述の通り、最初の発砲者に関しては諸説がある。その中で、最も無理と矛盾が多く、事実である可能性の少ないものが「日本側発砲説」なのである。

### 第三節 真犯人は誰か

#### 拡大を策した共産分子

「日本軍謀略」の主張は完全に崩れた。では事件の真相は何か。偶発か、何者かの謀略か。事件をめぐる不可思議な点がいくつかある。

最初の数発に続いて十数発の射撃が我軍に加へられたが、この間、宛平县城の城壁と堤防の間に懐中電灯の明滅による信号らしきものが交はされるのが、少なくとも数名の将兵によつて現認されてゐる(既述)。これは堤防上の中国兵が城内中国軍の何者かと呼応し、あるいはその指令の下に発砲したことを十分に推測させるものである。それは何者だつたのか。

堤防上の不法発砲者が中国正規兵であり、従つて「城外に中国兵は居らぬ」との秦徳純の言が嘘だつたことは先に触れた。東京裁判で桜井徳太郎氏(事件当時第二十九軍顧問)は「竜王廟に部下は居らぬ。発砲者は匪賊であらう」と云つてゐた金振中は、八日午前五時四十分頃、竜王廟方面に熾んな銃声が出るや前言を取消し、部下が竜王廟に在ることを告白した。彼は私を偽つてゐたのだ」と証言してゐる。更に「回想」の中で金は「蘆溝橋に着任するや直ちに戦闘態勢に兵を配置し、四個中隊のうち比較的強力な第十一中隊を竜王廟付近に駐屯させた」旨を述べて居り、事件当時、堤防上に居たのが中国正規軍だつたことは間違ひない。因に金振中は後に中共側に走つた男である。

では何故、秦徳純も金振中も「城外に中国兵は一兵も居らぬ」と嘘をついたのであらうか。そこにはどうしても謀略の影が拭ひきれないのである。

事件発生後、日華双方を挑発するやうな銃声が頻発するので、七月二十二日夜、我が憲兵隊と特務機関で調査したところ、中共北方局主任・劉少奇指導下に北平・清華大学生達が土炮と爆竹を鳴らして日華双方を刺激し、事変拡大を策してゐたことが判明してゐるし、これと符合するかの如く、戦後、中共軍将校となつた経歴をもつ葛西純一氏は中共軍の「戦士政治課本」の中に、事件は「劉少奇の指揮を受けた一隊が決死的に中国共産党中央の指令に基づいて実行した」ものであることが書いてあるのを見たとき著書(「新資料・蘆溝橋事件」)に記してゐる。このことは事件の策謀者が中共であることを中共自身が告白したものと云ふべきである。

さて右の諸点を考察する時、それらをつなぐ一本の太い線として中国共産党を指定するのは極めて自然である。従来、我国の学界で事件の真犯人は劉少奇を主犯とする中共であるとの説が有力とされてきたのも右の見地からで

あつた（表向き「偶発説」を採つてゐるのは中国に対する曲学阿世的な迎合からであらう）。

### 中国側資料が告白した陰謀

最近ある中国側資料が公表された。事件五十周年の昭和六十二年五月、中国人民大学出版社から発行された『蘆溝橋事変風雲篇』（武月星、林治波、林華、劉友于著）である。その中に事件直前に於ける中国第二十九軍の対日戦争計画について詳細な記述があるが、紙幅の都合上、略記すれば次の如くである。

昭和十二年五月、宛平県城には一個中隊と大隊本部があつたが、同月下旬、城外に三個中隊が増駐、六月には蘆溝橋西南の長辛店に二個大隊が増派された。この頃、永定河左岸堤防の十個のトーチカを掘り出して整備した。第二十九軍は軍事訓練強化の他、部隊の抗日救国政治教育を推進した。同年四、五月、第二十九軍は具体的な対日作戦計画を立てた。右計画は張樾亭第二十九軍参謀長が作成したもので、国民政府の主張に基づき、必要時には北平を撤収して実力を保存し、全国の抗戦を待つ」といふ消極的なものだった。だが、これに反対したのが第二十九軍副参謀長の張克俠であつた。彼は「攻撃を以て守備となす」（以攻為守）積極的な日本軍撃滅計画を別に策定し、推進したのである。（以下省略）

では張克俠とは何者だつたのか。彼こそ、中共中央から直接に指令を受ける秘密共産党員であつた。張克俠と中国共産党との関係については、昭和六十一年九月新華書店北京發行所から出版された『北京地区抗戦史料』所収の「劉少奇同志の第二十九軍に対する統一戦線工作に関する史実の検討」なる一文が、張克俠自身の回顧談を含め、中共の遠大なる秘密工作のほぼ全容を伝へてゐるので、その一部分を紹介しよう。

張克俠（本名「張樹棠」は大正十二年馮玉祥の部隊に入隊、昭和四年中国共産党に入党して特別党員となり、中共中央と直接に連絡しつづ、長期に亘つて西北軍中に潜伏を続けて機会を待つた。昭和九年張自忠の三十八師参

謀長及び第二十九軍副参謀長となつた。その後、中共中央と張克俠との連絡は蕭明（戦後、北京市总工会主席、昭和三十四年病死）があつた。その頃（昭和十一年から十三年まで）劉少奇は中共中央代表、北方局書記で、北支での抗日民族統一戦線を推進し、抗日ゲリラ戦展開の工作に従事してゐた。

さて張克俠の立てた積極的対日作戦計画とは、第二十九軍十万の兵力をいくつかの集団軍に編成し、北京、天津、チャハルの三戦区に分け、この地区に分散配置してゐる日本軍を撃滅した後、機を見て山海関に出撃、関外の領土即ち満洲を奪回しようとするものだった。張克俠はこの作戦計画を蕭明を経て党に報告、間もなく蕭明は「党組織がこの作戦計画を承認、同意したのでその通り執行してよい」と書いたメモを張に手渡した。右計画を見て支持を与へ同意した党指導者は北方局主任の劉少奇書記であつたと張克俠は認めてゐる。斯くして張克俠は宋哲元と第二十九軍将兵の抗日を積極的に推進し、蘆溝橋で奮起させ抗戦八年の序幕を開いたのである——と。

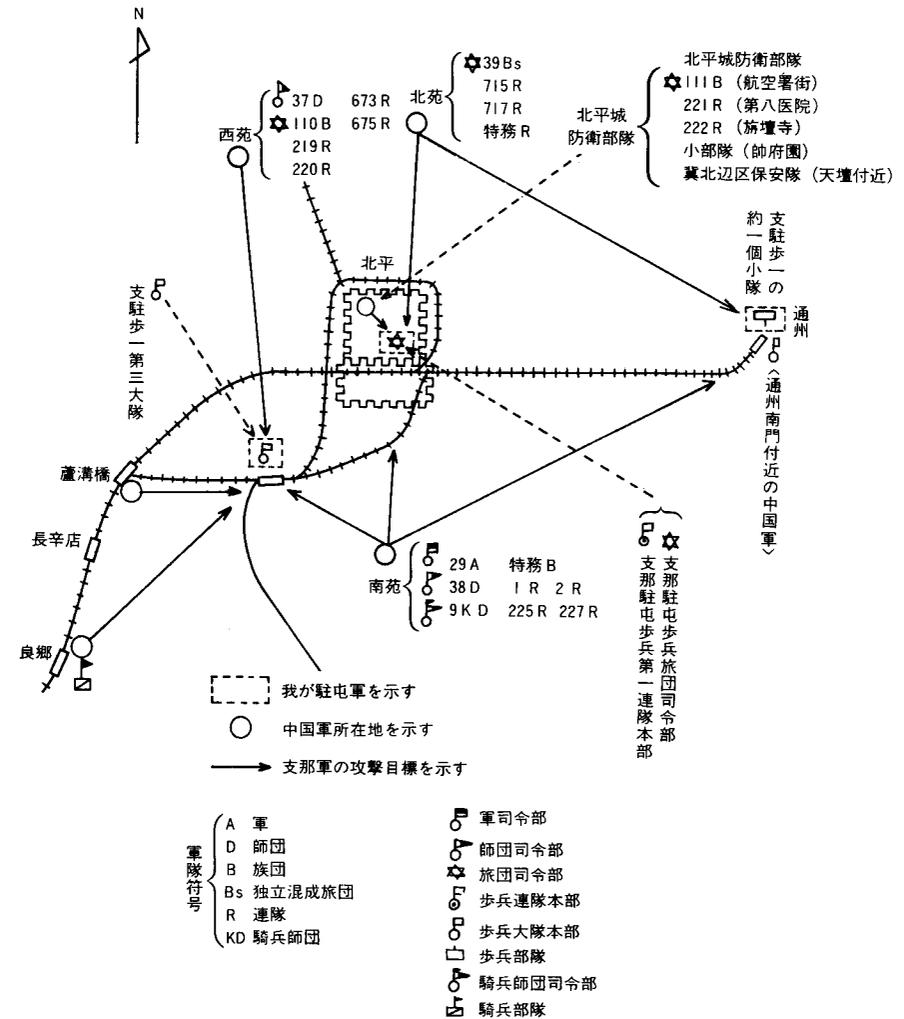
語るに落ちる、とはこのことであらう。即ち、我が支那駐屯軍に対する全面的攻撃作戦を計画してゐたのが第二十九軍副参謀長の要職にあつた秘密党員・張克俠であり、その計画を承認し実行を指示したのが中共中央を代表してゐた北方局主任・劉少奇であつたのだ。

七月二十九日に平津地方を平定した我が歩兵旅団司令部が、八月八日北平に入城した際、冀察綏靖公署参謀処の書類綴の中に、北平付近に分散駐屯する日本軍を各個撃破する第二十九軍特別演習実施計画書（五月二十三日といふ実施日を記入した作戦要図添付）を発見してゐるが（396頁挿入図参照）、これが或いは張克俠の起案に基づく作戦計画だったのかも知れない。

では右の対日攻撃計画と蘆溝橋事件との関係はどうなのか。筆者はかう推論する。最初の不法射撃は第二十九軍中の先走つた共産分子か抗日分子によるものであつたかも知れない。だが以後の執拗な射撃は、中共中央の承認の下に張克俠の積極的な対日作戦計画を發動実施したものであるまいか、と——。云ひ換へれば、偶発的な不法射撃が、中国共産党による既定の対日戦争計画を始動させたのかも知れないと。蘆溝橋事件の真相は、結局その辺に落

# 北平周辺駐屯日本軍撃破第29軍特別演習計画要図

1937年 5月23日



着くのではないかと筆者は考へる。

## 真犯人を不問に付した東京裁判

東京裁判の蘆溝橋事件に関する判決文には支那駐屯日本軍の数をはじめ大小の誤りや虚偽が含まれてゐるが、最も奇妙なことは、最初の不法射撃について何等言及する所なく、ただ「緊張と不安の雰囲気の中で」事件が発生したといふ漠然たる表現に留つてゐる点である。満洲事変の発端となつた柳条溝の満鉄爆破については日本軍部の謀略として厳しく責任が追及されたのに比べて、蘆溝橋の発砲者が何者であつたかは殆ど追及されることなく、緊迫した状況を作り出した日本側に責任がある、といふ風に論理のすり替へが行なはれたのであつた。

それは何故か。恐らく、最初の発砲者について深く追及を進めて行くと、中国側に不利な証拠が出てくることを惧れたためであらうと思はれる。因みに東京裁判での中華民国代表判事の梅汝璈は、裁判終了後、中共側に走つた人物である。先述した通り、蘆溝橋事件の背後に中共の遠大な策謀があつたことを考へるならば、中共系判事を構成員に含む東京裁判法廷が蘆溝橋事件の真犯人及びその責任の所在を深く追及せず、曖昧な形で結局は不問に付し、顧みて他を云ふが如く、事件の背景を形成した日本の責任なるものを追及せんとしたのもさこそと思はれるのである。

それにしても、満洲事変段階では満鉄爆破事件を執拗に追及して事変の歴史的背景に対する検討を無視した裁判所が、支那事変段階では逆に日支衝突の直接原因である不法射撃については深く問はず事件の背景を重視する裁判姿勢を採つたことは、飽く迄も日本を有罪にせんとする意図に出たことは疑ひの余地もなく、裁判に於ける斯かるダブル・スタンダード(二重基準)は、東京裁判が結局は政治裁判であり、政治的復讐劇以外の何物でもなかつたことを遺憾なく物語つてゐる。